滅人-メツビト-

caster

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
滅人－メツビト－

【Ｎコード】
Ｎ７５２９Ｌ

【作者名】
ｃａｓｔｅｒ

【あらすじ】
生き物にとり憑き人間を襲う「闇人」と幾度と名前を変え、古来より闇人を滅するためだけに存在してきた「滅人」の死闘の物語。

覚醒？

月明かりの照らす閑静な住宅街。

誠は尻餅をつき、月を見上げていた。

いや、正確には月を見上げていたのではないだろう。

誠の目の前に男が背を向けて立っていた。

長身で肩まである銀色の髪、黒いコートを着て手には血塗られた刀が握られていた。

刀の先から血がポタッポタッと垂れる。

そして、銀髪の男の目の前には、腰のあたりで真っ二つにされた死体が転がっている。

死体から流れ出た真っ赤な鮮血を月明かりが照らし、血に映る月は真っ赤にそまり、不気味に輝いている。

「戒厳令が出ているはずだが？」

銀髪の男はゆっくり振り返り、誠に近づいてきた。そして、誠を見下すように睨む。

誠は銀髪の男の放つ殺気で立つことができず、尻餅をついたまま後ずさるが、ブロック塀に行き詰った。

「・・・・・」

誠は恐怖で声が出なかった。

「・・・ちっ！！　余計な仕事を増やしやがって・・・」

頭を掻きながら銀髪の男はぼやく。

そして刀を頭の上で構えた。

「・・・悪く思うなよ？　戒厳令が出てるにもかかわらず外に出ているからだ」

銀髪の男は冷たくそう言い放って柄に力を入れる。

そして刀を振り下ろそうとした次の瞬間・・・

「ぐぎゃぁあああああああああああああああああああああ」

誠の心臓が飛び上がった。しかし、銀髪の男は刀を構えたまま微動だにしない。

誠が叫び声の方向をみると、先ほど真っ二つにされ無残な姿で放置されていた「それ」だった。

人間でも動物でもない。この世のものとは思えない姿の怪物が、手を足代わりに上半身だけで立っていた。

「キ・・きさマ！！　許さんゾ・・・　殺ス！！」

怪物はそう叫び、無防備な銀髪の男に襲いかかる。

両手を器用に使って走り、銀髪の男に飛びかかった。

「はぁ・・・　何度も言わせるんじゃねぇ・・・！　余計な仕事を・・・」

「増やすなぁ！！！」

銀髪の男は怒声と同時に振りかえり、怪物を横に一閃した。

そして、すかさず怪物の頭から下にかけて刀を振り下ろした。

しかし、銀髪男は斬るのをやめず、四方八方から切り刻んだ。

怪物の肉片が宙を舞い、グロテスクな音と同時に地面に叩き付けられた。

誠はその光景を見て嘔吐した。常人の正しい反応だ。

誠が荒く呼吸をしていると、銀髪の男が近づいてきた。

銀髪の男は再び刀を構えた。

「これで終いだ」

銀髪の男は冷たく言い放ち、刀を振り下ろした。

それと同時に誠の意識は途絶えた。

覚醒？

パッと目が開き誠は眠りから覚めた。

真っ白な天井が目に映る。

（ここはどこだ・・・　俺は一体何を・・・）

身体をゆっくり起こそうと、力を入れると全身に激痛が走った。

そのままベットに倒れ、しばらく痛みに悶える。

痛みが治まり、今度は慎重に身体を起こし、そのままの状態であたりを見回す。

ここは病院だろうか、部屋全体が白くとても広い。出入り口であろう木製のドア以外に外に出られるものはなかった。

もちろん木製の扉も白塗りである。

そしてその広い部屋の中心にパイプで作られたベットがある。その上に誠は横になっていた。

（それにしてもなぜ俺はここに・・・　確か俺は・・・）

自分の記憶を遡る。

（おれはあの時、刀で斬り殺されたはず・・・　でも刀傷はおろか、外傷がほとんどない・・・　それにあの銀髪の男とあの怪物・・・　何者なんだ？

あの男はあの男で助けた人間を斬り殺そうとするかよッ　普通・・・）

愚痴を混ぜながら、自問自答を繰り返していると、部屋の外から足音が聞こえてきた。

ゆっくりとこの部屋に近づいてくるのがわかる。

やがてその足音は、部屋の前で止まった。

誠は身構えながらも、ドアをジっと見つめる。

「…目が覚めたか」

見覚えのある男が入ってきた。

その瞬間、誠の眼は一瞬にして警戒の眼差しに変わっていった。

長身で黒いコートを着た銀髪の男

紛れもなく、昨日誠に刀を振り下ろした男だった。

「てめぇ！！　うッ…」

銀髪の男に殴りかかろうとした瞬間全身に激痛が走った。そして誠は床に崩れ落ちた。

「激しく動くなッ！！　表面しか治してないんだ、傷口が開くぞ・・・」

銀髪の男の怒声が部屋に響き渡る。

（傷口？　そうか、やはり俺はこの男に・・・　でもどうして生きてるんだ・・・・？）

『生きている』それが誠の一番の疑問だった。

「さて、歩くぐらいはできるだろ。　立て」

ああ・・・　こいつ最低だ・・・　誠は心底そう思った。

「おい待てよ。痛くて身体が動かせねぇって！」

銀髪の男は誠を一瞥すると、頭を掻きながら舌打ちをした」

「・・・たく！　つくづくめんどくさい奴だな」

そう言うと、誠の腕を持ち上げて無理やり立たせ、ベットに座らせた。

そして、銀髪の男は皮の手袋を外し、誠の鳩尾のあたりに手を添える。

「痛みの祖よ、この者の痛みを鎮静せよ・・・」

銀髪の男がそう唱えると、手の甲に青色の六芒星が浮かび上がった。

そして、六芒星が光を放つと誠から少しだが痛みが引いた。

「これは一体・・・」

六芒星の光が消えると同時に、銀髪の男は手を離した。

「立ってみろ」

相変わらず無愛想な口調で銀髪男は言った。

誠は言われるがままに恐る恐る立ってみた。　さっきまで立つだけで激痛が走っていたはずなのに、誠は平気であった。

誠は初めて見る物を見るような目で自分の身体を見つめた。

「多少の痛みはあるだろうが、それくらい我慢しろ。じきに無くなる。行くぞ」

「え・・　ちょ、どこにだよ」

「い　い　か　ら　着　い　て　こ　い　っ　！　！　！　！」

銀髪の男が物凄い見幕でどなり散らした。よほど、めんどくさいらしい・・・

「・・・はい」

これ以上コイツの逆鱗に触れるような発言は避けようと、無意識のうちに誠は返事をしていた。

誠はおとなしく銀髪の男についていき部屋を出た。

しかし、誠は知る由もなかった。この先銀髪の男と共に闘い、銀髪

の男のように『奴ら』を殺すことになるとは…

誠の運命の歯車がゆっくり回り始めた。

覚醒？

「なぁ、いつまで歩くんだ？」

誠は歩きながら聞いた。

しかし、銀髪の男は黙って歩き続ける。

「ここはどこなんだよ」

誠が何を言っても反応しない。

あの白い部屋から出てからどれくらい歩いたのだろうか

歩いても歩いても同じ視界が広がっている。

両側にはドア、天井にはシャンデリアが一定の間隔についている。

（なんなんだ？ここは）

誠はきょろきょろしながら心の中で思う。

（それにしても、あの男の格好・・・。　こいつは一体何者なんだ・・・　見るからに危険すぎる！！　俺こいつに一度殺されてるもんな・・・）

男の腰には日本刀が付いていて、さらに背中には「滅」の刺繍が縫い付けられている。

誠はそれを見て、悪寒がした。

（でも、このままじゃ今度は確実に殺される気がする・・・　何とかしないとな・・・）

誠は辺りを見渡し、武器になりそうなものを探した。

しかし、その考えはすぐに却下された。

例え武器を手に入れたとしても、果たして銀髪の男に勝てるだろうか。

相手は間違えなくその道のプロであろう。返り討ちにあって逆に殺されるのは目に見えていた。

誠は悩んだ末、やはりこれしか選択肢はないと思った。

（逃げるしかないか・・・）

誠は逃げるチャンスがないかと伺っていると５０メートルほど前方に曲がり角がある。

（よし。とりあえず、こいつから離れれば何とかなるかもな・・・）

現状での誠から曲がり角までの距離は約３０メートル。

曲がり角に近づくにつれて、誠の心臓の鼓動は次第に大きくなっていく。

２０メートル

１０メートル

・・・

（今だ！ここを曲がって一気に振り切れば・・・！）

「逃げられると思ったか？」

（！？）

誠が全速力で走りだそうとした瞬間、今まで話しかけても口を開かなかった男が話しかけてきた。とても殺気立った声色で。

それと同時に誠は首筋に冷たさと痛みを感じた。

「言ったはずだ。仕事を増やすな・・・！　少しでも動いてみろ、このまま薙ぎ払うぞ！！」

銀髪の男は誠の首筋に刀を添えて、動けない誠を見下すように言った。

「くっ…！」

動きたくても動けなかった。動けば容赦なく首をとばすという殺気が刀からヒシヒシ伝わってくる。

傷も血が垂れる程度のものでしかなかったが、何倍も痛く感じた。

しばらくの沈黙の後、銀髪の男はゆっくりと刀を誠の首から離し、

刀はカチンっと音を立てて腰についている鞘に納めた。
その音が合図となるように、誠の身体から大量の汗が吹き出し、その場に膝から崩れ落ちた。
誠は手を床に付き、肩で呼吸をしている。
それを見た銀髪の男は、呆れたように言った。
「何やってんだ。　立てコラ」
銀髪の男は誠の腕をつかみ、無理矢理立たせた。
誠は掴まれた手を振り払い、自力で立ち肩で息をしている。
「・・・お前何か勘違いしてないか？　言うことを聞いていれば危害は加えん」
（は？）
予想外の言葉であった。
「そ、そんなの信用できるかよっ・・・！」
「信じるか信じないかは貴様の好きにすればいいさ。だが、また妙な真似したら容赦しねぇぞ・・・　素直に従った方が利口だと思うが？」
銀髪の男の言うとおりだろう、誠は認めざるを得なかった。

銀髪の男が言っていることが本当だろうが嘘だろうが今はまだ生きていられる。だとすれば、男の言っていることが嘘だとしても今より有利な状況になる可能性だってある。

「・・・わかった」

誠は自分自身を納得させ、男に従うことにした。

「やけに素直だな」

銀髪の男は嫌味な笑みを浮かべた。

「勘違いするなよっ！　てめーはあとで必ずぶっ飛ばす！！」

誠は中指を立て男を挑発する。

しかし、銀髪の男は目もくれず、くだらんとばかりにゆっくり１８０度回転して再び歩き出した。

「なっ・・・！！」

誠はなんか反応しろよと声を上げようとしたが、またややこしいことになりかねないということもあり、そのまま言葉を出さず飲み込んだ。

二人は同じ景色の廊下を歩きだした。

覚醒？

再び廊下を歩きだして１５分が経った。

相変わらず、同じ景色は続いていた。

二人の間には沈黙が続き、気まずい雰囲気が流れてた。

誠は銀髪の男に話しかけようとしたが、ややこしい・・・　その繰り返しも誠の中で１５分前から続いていた。

銀髪の男は相変わらずしれっとしているが、誠にしてみれば、苦痛以外に他ならなかった。

（うう・・・　さすがに疲れてきたな・・・　なんでこんな広いんだよここは）

廊下には同じ木製のドアとシャンデリアしかないので、ここがどこでどういう場所なのか不明であった。

唯一わかることは地下であるということ。そこには窓が一切なく、外が昼なのか夜なのかわからないことから誠はそう推測した。

しばらくして沈黙が破れた。沈黙を破ったのは意外にも銀髪の男の方であった。

「おまえ、できることは？」

「え？」

いきなりの質問であったので、誠は返答に困った。

「特技は何だと聞いている！！　貴様学生だろ。部活とかやっているんじゃないのか！」

こいつすぐに怒鳴るな・・・　誠はみけんに皺を寄せ、言われるがままに答える。

「剣道、やってるけど・・・」

「腕は」

「一応、４段・・・」

「ほぉ、貴様ごときが有段者とはな。意外だ」

（テメェ…　俺をどんな目で見てたんだ・・・　ぜってーぶっ飛ばす）

誠は心の中でそう思い、あえて口には出さない。

「まぁ、剣道でよかったぞ。　弓道とか射撃とかぬかしやがってたら斬り殺してたとこだ」

「なっ・・・」

誠は思わず身構える。

「冗談だ」

銀髪の男は悪びれた様子もなくさらっと言った。

（冗談に聞こえねーよ・・・）

1度斬り殺されているということもあり、誠は言葉を誤った時のことを想像した。冗談だとわかっていながらも悪寒がした。

その会話を最後に再び沈黙が訪れた。

再び訪れた沈黙と銀髪の男の冗談と解釈できない冗談のダブルパンチで誠は精神的に疲れていた。

それからさらに10分くらい歩いただろうか。誠が視線を下に向けて歩いていると行き止まりに顔をぶつけた。

壁にしては固さが足りない気がする。　誠は『ぶつかった壁』をよく見ると青ざめた。

ぶつかったのは男の背中だった。　また怒鳴られる！っと誠は身構えたが、男の方はぶつかられたことは全く気にしていないようで、まっすぐ前を見据えている。

「着いたぞ」

誠は男の見据えている方向をみると、そこには木のドアがあった。
　しかし、今まで両サイドにあったようなドアではなく、両開きのドアがあり、ドアの奥には明らかに『偉い人』が居るような雰囲気を漂わせていた。

コンコン！　銀髪の男がその両開きのドアをノックした。

「坂本です。局長、いらっしゃいますでしょうか」

「どうぞ、入ってください」

「失礼します」

男はドアノブを手にかけてると、誠に向かって念を押すように言った。

「・・・失礼なことしてみろ。殺すぞ」

「わ、わかってるよ…！」

誠に対しての態度とは全く違う。こいつみたいな奴を従えるなんてどんな凶暴な奴なんだ…　誠は背筋に寒気を覚えた。

男がドアノブを回し、ドアをゆっくり押す。　ギギギッ　っと音を立てて開いたドアの奥に二人はゆっくり歩き出した。

覚醒？

「局長、お待たせしました。こいつが例の…」

銀髪の男が軽くおじぎをした。

誠の入った部屋は、先ほど自分が居た部屋とはうって変っていた。
天井にはシャンデリア、床には一般庶民の家にはないような絨毯。
部屋のいたる所にも高級そうな家具、骨董品が立ち並んでいる。
部屋の中央には向い座りの大きな机とソファー、その奥に「社長の椅子と机」
まぁ、いわゆる高級なイスと机がある。

そこに一人の男が座っていた。

「すまないね。怪我も治りきっていないのに呼び出したりして。」

「いえ、大丈夫です。歩ける程度には治療しましたので。」

銀髪の男が勝手に答える。

大丈夫・・・じゃねぇよ!!　と誠は叫びたかったが、この部屋に入る前の男の言葉が頭を過ぎり、無理やり飲み込んだ。

（それにしても・・・）

誠には疑わしい光景が広がっている。

部屋にある高級家具の数々もそうだが、それよりも何もこんな優男

がこいつボス？
まったくもって信じられん…

優男の容姿は、誠の想像していたガチガチムチムチで、顔に刀傷がある悪人面とは全く正反対であった。　今流行りの草食系男子？
黒縁のデザイン眼鏡をかけ、スーツを着てネクタイ締めた感じである。

「君が斉藤誠君だね。　はじめまして、僕は内藤雅彦（ないとうまさひこ）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7529l/

滅人-メツビト-

2010年10月9日00時03分発行